



秘蕉門  
御詣寂禁

地





俳諧寂榮卷之中

眼の事

眼の字を定む後糸向杖化す一字眼を  
研うよまふかひひなれも夕念この時  
に下の偏か

枯枝の寸のまうらう秋の暮

秋のけゆく高かのを 里

是を場を字眼よけいめ

かう株や水田のくしの秋の暮

これかゝる目よけの

是時を字眼よけいめ



梅う香まのつと目のある山をみ哉

いこころうくよ雛子のころころ

見舞句よ場も時多もあはるあよ時を待合

せたるこ雛子のころころ梅のりよあを思す

さよのいしち沖よりあはれしめをされ

くぬかといこころまきあふまき

きこりそくめねこ

ぬとをいあといふ句は軒垣かよ附るまき

ちほとらよせらよ舟といよは海川と附る

一ち一海といよは舟と附るいし

百人の目より一此の光は娘持山は月と附る

いし一光は若野月と娘持と附るはあは

めきこ照めいあはしきくはいあ

さよのいしころよりころのあき 加 生

鴨たに之群をいしこのあ 角

いそろう合まのねこ海とらあまら合せ

こたといはといよいと一圓はあまらあし

郭若野公あはれあはれあはれあはれ

あのかかあまなたるえめい

いそ心附のねこ

いそあはれあはれあはれあはれ

是比南の字を礎よあまらあをい

輪のあまら  
あまらあはれ



春の日の

ねむくの比を定む時をうしとの論ふし  
陸のこ軍くゆりし子に宿るを

頼はあはるまらむのしんま

是自の句よ自の指かから句平句よ高也

んりおし

いりくめ若もむつかしをまのま

これく蝶のまはさめめあ

是自のまらむし句めはしてとてあは

宿新そちうしあるうし白は禁句を別

冬の日の  
よ子のあはなと物心のあまをまらむあは

やわ月や照ゆつりしあはひ居し

夕のぬりのまらうりうり

是格をまらうしあはしひるあまをみえ句

の神をうけしとてなる色しはあこよ

ねむくのあは神を木の葉の

と附たり此句を後とて後自よとて句の

あこは是非あまのあをすくおし

ちあまのまらむしとてあはらふおとあ

此句三枝沈とすしせし

芭蕉小文庫ふ餘別の句とて

新麦のうしとすしあまのあ

ましお板やめあてらうなる







十五(一)つわくのてしく贈答の協り(一)は遠(一)附(一)  
志(一)る(一)一(一)つ(一)て(一)ち(一)や(一)る(一)曲(一)店(一)の(一)田(一)部(一)奇(一)

心(一)を(一)あ(一)げ(一)た(一)め(一)し(一)る(一)破(一)の(一)わ(一)り(一)る(一)

芝(一)園(一)若(一)ふ(一)し(一)玉(一)此(一)可(一)林(一)附(一)と(一)服(一)こ(一)ら(一)そ(一)ま(一)

い(一)子(一)石(一)被(一)は(一)思(一)と(一)附(一)ら(一)あ(一)く(一)

心(一)成(一)愛(一)の(一)お(一)の(一)お(一)ま(一)こ(一)を(一)思(一)か(一)ふ(一)め(一)

人(一)の(一)粧(一)ひ(一)を(一)か(一)り(一)し(一)と(一)い(一)へ(一)

鴨(一)か(一)く(一)や(一)ら(一)矢(一)林(一)控(一)て(一)十(一)余(一)年(一) 去(一)未(一)

又(一)ら(一)そ(一)め(一)一(一)ら(一)の(一)山(一)か(一) 氣(一)雪(一)

ほ(一)り(一)と(一)案(一)院(一)此(一)の(一)島(一)居(一)て(一) 其(一)の(一)用(一)

是(一)お(一)の(一)た(一>く(一>い(一>け(一>を(一>く(一>く(一>一(一>そ(一>の(一>時(一>め(一>

風(一)流(一)し(一)そ(一)初(一>心(一>の(一>院(一>と(一>す(一> 一(一>ら(一>の(一>自(一>

得(一)の(一>と(一>ま(一>あ(一>く(一>有(一>る(一>一(一>

○中(一)三(一)の(一>事(一>一(一>

た(一>け(一>さ(一>く(一>飲(一>さ(一>一(一>あ(一>ら(一>十(一>名(一>の(一>位(一>根(一>カ(一>

名(一>の(一>位(一>中(一>三(一>七(一>名(一>の(一>位(一>こ(一>と(一>有(一>る(一>一(一>ら(一>の(一>

故(一>ま(一>そ(一>ら(一>ぬ(一>ま(一>ぬ(一>ら(一>し(一>ぬ(一>め(一>た(一>く(一>ひ(一>ら(一>の(一>

大(一>け(一>を(一>治(一>る(一>一(一>

冬(一>の(一>日(一>

出(一>産(一>の(一>勢(一>を(一>そ(一>の(一>初(一>人(一>の(一>名(一>を(一>ら(一>て(一>

野(一>鳥(一>を(一>そ(一>の(一>た(一>ら(一>ぬ(一>る(一>際(一>の(一>お(一>お(一>と(一>て(一>

来(一>あ(一>ま(一>ま(一>の(一>用(一>を(一>す(一>ら(一>ふ(一>本(一>具(一>控(一>へ(一>

二(一>番(一>中(一>ら(一>も(一>さ(一>し(一>た(一>ら(一>あ(一>ら(一>お(一>て(一>



ぢ根ぢねのそいゝぬちまふーくれー

そいゝぬちまふーくれー

費捨し車舟を罷遊しめ餉す

そいゝぬちまふーくれー

なるなるのそいゝぬちまふーくれー

まてい武の備すゝめをいゝぬちまふーくれー

新たみ後かしたる月れ

有賊餘ゝめをいゝぬちまふーくれー

そいゝぬちまふーくれー

居て下りもいゝぬちまふーくれー

自らいゝぬちまふーくれー

いゝぬちまふーくれー

めをいゝぬちまふーくれー

る時めをいゝぬちまふーくれー

此句をいゝぬちまふーくれー

時のそいゝぬちまふーくれー

せーしにいゝぬちまふーくれー

あまのいゝぬちまふーくれー

あせをいゝぬちまふーくれー

そいゝぬちまふーくれー

一丁あかたそた

いゝぬちまふーくれー



夕のきこほろのそらて帰らん

けりこよ疑ふをれと燈おとらての  
字を句申よこ色たるこ

久あいのむのうれとけいさむのさ

志はちつゝあめなくさめちらん

志つ心なくいかてをめちらんといかて

ら禁林ほよむしとい古今のほ

涼川  
山雀のふとよめしこころもあ

そつちかーるし

西之雀ちる山田まははこらちれや

そつちれやるし

花荊棘馬骨のしんるさめい

何のゆまひとらはるる上遠下い

そつち字のちよめとこいひはさかんし

ち字ををるるとちりし

簾時身札潦朝朗

あよめたふしをおとるとちりし

こけんるちりし

飯粒 飯巾 飯の粒 飯の巾 飯の

るよめあよめ入つぬし一理方すし

いづみとのつやうもはしとらぬ

かくあゆむとらぬとらぬとらぬ

セブツヤニ  
まちのえ



こころ七ちの位なるをふるく業たて  
且四句めさう句作殊のつくせよと  
世なる翁中三位を持つあこねを  
句のの心なるを  
たふまき月あり

本意はあつれぬるよの酒の殊

高貴のゆへにらむし一知まじ

蜀黍<sup>あふの穂</sup>をみゆい風ふふたふと  
了場の直前の後まじむ

かこめ如く向といふ字を礎のまじむ  
虫放すむあつる月と云如く之切て  
月と之<sup>まじ</sup>まじりてまじりて月と業  
の月と月とまじりて縁のけいふ

碧由翁させしとまじりる白

とつてまじりて月の例とあれども極たまわ  
たらしむ式の法をまじりてそのまじりて  
新るる

他もまじりる

句見  
まじりてる場集は乃人

まじりてるゆへにまじりて

名ふれおのしつて野の家集

まじりてるゆへにまじりて



たゞ人に蝶にまづあふれしるるも秋も花  
うよあちきこしらぬまゝ附くしやあそび  
のこころ句端し花のうきほの可成さま  
のあつたつ時めし

いづちちち  
送あふ二腰はししてまき人

子部よむおのさうられ一頁田

他まよるゆくの殆どてあふる者十た  
とくは春あふ二まぶこころ 釋年貞

馬川 雨露尸堞峰入 花入 出代 彼山年たふの  
はるまの客とら名のつく実とサのふ

錦波あふよまむむと九里

鶺鴒はし六の強をうしひ出て

まのすまゝ七種とらふ  
月み色木とあふ山附くつこ

築地せつまよ田ん平の馬

相国寺牡丹のあふ盛る

梳のあつこころあふやま

かくの如くいふめらの雑め句あふよそを  
むこのめとくせよと云ふいぬはと心なる

二句一まゝのま

送絶をすまひつあうとあふ



妻乃あらしし海より人

秋輝ののぶるまきく静かに

さめのこはしむるまむつちの

侍りし一書

尾ふさおろよしりく入ぬよ

雷つたをまらちを泳めらゆ

二句一書にあひよるおしるゆめのみ

白作をちゆく海をしはるく海女の

たしつかあ

号つげのる果はるおしるまきく静を

秋の初るくみの静かな

くみしる海をよしりくまきく

静かなるおしるまきく

まきくかきそのまきりしりく

女まきくまきくまきくの静

又

白静の真

敵よ靴のまきくもまきくの静

農明はおまきよまきく静子のまきく

海<sup>春の</sup>たまきはまきくもまきく

おまきくまきく静をまきく

ふふーを切てのけいしりく

静かなるおまきくまきく

かき親しはまきくまきく



ちぢかめ申せ人をぢぢのひ

入ホるは信守の信守のつまを

申もぢぢのぢぢの 仗

兵の雇ふとるの 二葉

ぢぢのぢぢのぢぢの人をぢぢのぢぢ

つぢぢぢぢのぢぢのぢぢ

ぢぢのぢぢ

ぢぢのぢぢぢぢとぢぢぢぢ

今ぢぢぢぢのぢぢのぢぢぢぢ

信守のぢぢのぢぢぢぢ

ぢぢぢぢのぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ



なるゆづりまははり集をめぐりてはる様  
を十部とてはる様をいひてはる様  
行の集はるのゆづり集をいひてはる  
はるのゆづり集をいひてはる  
ゆづり集のたぐひはる集をいひてはる  
あはるゆづり集をいひてはる  
るゆづり集をいひてはる  
はるゆづり集をいひてはる  
名所をいひてはる

かきやあきや代あき  
あきやあきや代あき

是思ひ合はるしおとひ合はるし  
ゆづり集のたぐひはる集をいひてはる  
はるゆづり集をいひてはる

是道すかきはるゆづり集をいひてはる  
んはるゆづり集をいひてはる  
はるゆづり集をいひてはる  
はるゆづり集をいひてはる

はるゆづり集をいひてはる

伏見の集はるゆづり集をいひてはる

はるゆづり集をいひてはる



初をよ伊勢の石眼明のれ物て

くぬきもたやく宮川ののり

そいよ谷まきまのる所は付ちるこまま

若を附る心なる

○聯句語詠のあつる三句の情の事

たみ 稲のまよひのちのちのちのち

あゝ心かきしめまらぬ鈴鹿心

の巻ひらりとやあつたれ

句解る身 葉紫もて人の娘をえしはれて

は勤の雲はおもひわかし

けよひのうらさあめあまのち

鳴子おとろくくく之教のかけ

ぬり人をはさそよ妹く身をほそ

新うもつたあまがくみの神

いふれ志もくあまのうすこれ

琵琶 琵琶おかくあまの

曲段の昆沙門志のよち 大

あかくてふくさつむすすの

くあもひ居る巫女のおい

人きていふははのうひは

園寄や矢利めはのれ

たなるあまのよとておとめ



捨し子も紫衣けり延はるん  
花子れくも女さるべきを江に捨て  
あはれくもあはれか

せき蝶も遊せおもひつるあなま  
月守下捨言の盡めけ免たりや  
人争風行ぬる免なると下  
傾城のせひーうらあられあり  
ひくた、身を捨てしてふるまひく

蚊もく捨し秋はなうらう  
あけふのよすくあふ結のせきまの  
あふの卵の種もあふはくおこして  
也子もあまのしーあふのあま

入月はる新ひこふ女若ひとら  
此者ちこあひく通る船のすし  
まき田うわうて夕まの風

ちん免ある女をあはるりの場  
巡礼死るこちのあけらう  
あふもてよのうつそあられある  
あふのくほしめちかきあは

うつあふとまぢちるあふはれはて  
白ふかきあふは様子いしあ  
黒うらあはたしあふあま切細し



足もとの草花はふりてくさりのうら

茶を煮るくさりの毎朝のさる察

中張のる古のえくさくさる花しん

芭蕉巻小文庫

花のえくさくさるくさるくさる

湯めふらおのりちをまきま

丹波から使うもふくして清くしん

しんを昔

はかりつけらるる花をまきま

婿しんもらつるをまきますしんめろ

又自花を入らくくつてまき

志らくしんしん花おまのしんめろ

けらるるしんめろ花おまのしん

くさるるしんめろのしんめろ

花起もまつけのまよはるる花

日はくたひもまをほくせ

宇陀法師

くさるるしんめろしんめろ

かゝるるしんめろしんめろ

やのて可物めら備まら

風呂敷まきまらるるしんめろ

續あまらるるしんめろ

川越のまきまらるるしんめろ

花をまきまらるるしんめろ

下二京のうらまらるるしんめろ







此二ツの中附うさふし

為尾あふしはあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

は二ツの中附うさふし

ひとあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

は二ツの中附うさふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

は二ツの中附うさふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

は二ツの中附うさふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

其の場

自

自

他

他

他

他

自

自

他

他

自

自



見ようの振うそとの女を

けお付ういあー

暮しつゝよ身もむつふ自業から

浮世の中もたぬらしむるも

西もろそみやうも結ぶ水や

此お付ういあー

是自他のつらち十四の解に女お付うい

あーと人持をち附ういあーいあー

とちよこ人持もちつゝもたぬら

時分 時節 天相 其場 其場の何

いと此お付ういあーいあー

きよめ日もたやハつさあうあう 時分

是時ち居お足答の事さ

おきりーしたるうあう 時分

是時ち居お足答の事さ

天飛やうあー 備 寸 天相

是天相日月両陰晴の事さ

板回立本を門あうつゝあーい

是直場野のぼら古宅 何とて其

場をんこ

あく様あーりあめ 其

人持あううつゝくつゝあーいあー



人情をさしうそ人情を句をさしうそ  
——うそも情せよとある

人偏人情用——はさしうそ人偏に  
句を二句續てうそ人情の何句もはさく

ゆゑ自他めらこし  
人偏と鯉を蘭也

人情と鯉を蘭也

此心なる一理あるに——  
詩句をもつて前句の自他をばさす

即ち情をばさす  
うそも情せよとある

かくはうそにおもひも他めらこし

情色さうゆゑありはさく

かくはうそにおもひも自の句はさす

自も他もさすおもひも自の句はさす

又ゆゑ句の自他をばさす

寸舌をばさす前句もさす

いふまじうさすはさし——なるはさす

うそも情せよとある

うそも情せよとある

うそも情せよとある

俳諧寂聲巻し中終



~~THE PAPER OF THE~~

~~RECORDS OF THE~~



